



「浦和のさかえに 歴史をほこる」開校152年目の挑戦

大いちょう

令和 5年 3月 1日
さいたま市立高砂小学校

高砂小学校だより 令和4年度 No. 11 048 (829) 2737

株式会社ディー・エヌ・エー代表取締役会長「南場 智子」氏の話より

校長 永山 誉

3月1日は、高砂小学校の開校記念日。明治4年3月1日、玉蔵院において「浦和郷学校」として開校以来、本日、153年目がスタートしました。思い返せば、3年前のこの時期に、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、突然の臨時休校となり、令和2年度の開校150周年に関する記念事業が、様々な方のお知恵とお力により、コロナ禍でもできることをと、工夫しながら数多くの事業が展開されましたことを思い出します。臨時休校開始から3年、ようやくポストコロナに向かったの動きが見えてきました。この3年間、保護者の皆様、そして地域の皆様の学校教育への御理解と御支援に深く感謝申し上げます。

ところで、3月6日は二十四節気の啓蟄^{けいちつ}。暦の上では、冬ごもりしていた虫たちが暖かさに誘われて動きはじめる時期を迎えました。早いもので、令和4年度も残すところ1か月。進級と卒業に向けてのまとめの月を迎えました。子どもたちには、この1年間をしっかりと振り返らせ、次へのステップに向けての準備に取り組ませたいと思います。

話は変わりますが、先日、株式会社ディー・エヌ・エーの設立者で、現在同会社の代表取締役会長を務める「南場 智子」氏のお話を聞く機会がありました。「事業家として教育を考える」と題して、校長向けに話されたものです。学校教育に携わる者として、企業のトップを務められた方の話は、とても新鮮であるとともに、これからの教育の在り方について大いに考える機会となりました。私たちは、日本が置かれている立場や社会の現状をよく理解した上で、より良い教育の在り方について考える必要があります。南場氏は、教育の現状を、皆が同じように考えることや正解を言い当てる教育になっていないか、夢中を手放す教育をしていないかなど警笛を鳴らしています。世界のビジネス界では、イノベーションの自立が高い者が勝ち残っていき、その点では日本は世界に負けているということ、また非常識からしかイノベーションは生まれないともしも言っています。そして、未来人材ビジョンとして大切と思われることを五つ述べています。

- ・同調するのではなく自分の考えを持つこと
- ・バラバラな個性を歓迎し、生かす組織であること
- ・夢中を手放さないこと
- ・夢中を共有する力を持つこと
- ・工夫する力を持つこと

今年度の教育活動を振り返った時、「自分の考えを持つ」「個性を生かす」「夢中にさせる」「夢中を共有する」「工夫する」といった取組が保障されていたのか、今一度考える機会となりました。私たちの目の前にいる子どもたちは、これからの社会を担う人材であり、無限の可能性を秘めています。子どもたちの個性を生かし、可能性を伸ばす教育の在り方について、自ら問い直してみたいと思っています。

学校だよりの本年度最終号の発行にあたり、卒業する6年生と各学年の課程を修了する1年生から5年生のお子様の新しい学年での御活躍を心よりお祈り申し上げますとともに、この1年間の保護者並びに地域の皆様の、学校教育への御理解と御支援に深く感謝申し上げます。